

その翌日、帰還のための収容所に入れると思いきや、そこから四、五キロ歩いたところの収容所に入れられた。そこには四千人くらいの日本人が収容されていた。また、だまされたかと思つたが、ナホトカの港が見えただけで、何か気が軽かつた。翌日から、毎日ナホトカの築港作業をさせられた。このナホトカには、日本人が山を削り、石を運び、さまざまな作業に従事させられた。しかし、この作業は楽しみでもあつた。ソ連の誘導艦が朝見えないと、お昼近くにその艦を先頭に日本の引揚船が日の丸を立てて入港してくる。そんなときほど、日の丸をありがたく思ったことはない。病院船の高砂丸、明優丸、第一大拓丸と、何か日本の空気に触れたような気がしてよかった。しかし、幾その船を見送つたことであつたらうか。ある日のことであつた。帰還の船が入港して、間もなく日本人が乗船を始めた。そして、夕刻近く出帆し始めた。そのとき、若い私の仲間が、いきなり「帰してくれ」と叫び、両膝をつき、男泣きに泣き崩れた。引揚船は、無情のようになくなっていった。私は「生きていれば必ず帰

れるよ」と、涙をこらえて彼に言つたが、しかしそれ自分に対して言つた慰めの言葉のようでもあつた。私たちにもいよいよ帰れる日が来た。第一、第二、第三収容所を経て、いよいよ乗船である。その日は忘れようとしても忘れられない。昭和二十二年六月十五日、船は第一大拓丸であつた。そして、六月十八日、舞鶴着、六月二十三日、夢に見た故郷の駅に降り立つた。

私の青春のページとは何であつたか。それは、食いたい、寝たい、帰りたい、ではなかつたでしょうか。

シベリア抑留で見た生地獄

和歌山県 松浦虎市

昭和十六年、召集令状を受け取つた。人生での青春を忠君愛国に命をかけて戦いを続けた。その終点はシベリア送りとなつたのです。

皆様のおかげで生還したが、シベリア抑留者の頭の

中には、今もなお忘れ去ることのできない、生き地獄を夢に見る人が多いことと存じます。

私たちは昭和二十年八月二十二日、満ソ国境に近い北滿嫩江（ノンジャン）という町に集結して、初めて終戦を知った。三千人余りの兵隊の口々からはさまざまな流言飛語が飛び交い、烏合の衆となつてしまった。一方、国境を越えて侵攻して来たソ連軍は、我々日本兵を銃剣でのおどかしのもとに、強制的にシベリアに拉致抑留した。

酷寒零下四十度、飢えと寒さ、昼夜の別なき重労働に耐えかねて万哭の涙をのんで死んでいった人々も多く、この痛恨事を世界平和のため全世界に伝えるべきであると信じ、忘れ去ろうとしている当時の記憶を思い出し、四十数年前の悲惨な体験を綴ることにしました。

昭和二十年八月二十八日、私たちはソ連兵の指揮に従い嫩江を出発、ウラジオストク経由で日本に帰るんだという口車に乗せられ三千人余りの兵隊が北滿の黒河に向かつて歩き始めたのだ。それは暑い日照りの中

で昼も夜も寝食を忘れての十一日間であった。

土煙の立つ道、流れ落ちる汗、のどが渇く、口の中は土ほこりでジャリジャリする。「ダバイ、ダバイ」とやかましく怒鳴る声に追い立てられ、ヤットのことで満ソ国境の黒河に着いたと思つたら、再びソ連兵が日本兵を押し倒し目ぼしい物を強奪した。何故にこんなことをするのかと尋ねたら、ソ連領へ入つたら監視兵が厳しいのでと、平気で答えた。

翌日ブラゴエシチェンスクというソ連の町へ入った。直ちに貨車に乗せられウラジオとは反対方向へ向かつて、ドアに鍵をかけられ十三日余り走っておろされたところは、人里も少ないスコポロジノという収容所のある駅であった。収容所の周囲には鉄条網が三重に張りめぐられ、四方の角々には高い監視所が設けられ、出入り口には常に出入りを厳しく監視をしていた。私たちは八十人余りの小隊であつたので収容所の片隅に部屋割りをされ、カイコ棚のような三段に組み立てられた棚に坐ると頭がつかえた。床板の上にはむしろが敷いてあつて、その上に着のみ着のままで寝起

きをしたのです。その棚の中で母国の夢を見ながら死んでいった人や、生き残った人、今もまぶたの中に浮かんでくる。

収容所に入って二日くらいして作業に出された。鉄道の復旧を早くするため、毎日多忙を極めた。十月に入ると急激に寒くなり作業から帰ってきても部屋の中は寒く、体を温める術もなく、寒さに震えながらウツラ、ウツラ夜を明かす。その上に鉄道が故障のために三日に一度より食糧が入ってこない。しかも入って来る食糧は、ヒエのかぶったコウリヤン、そのおかゆが飯盒の底に少したまる程度しかもらえない。厳しい重労働で腹が減る。寒いので睡眠はとれない。栄養失調となってバタバタとわずかに二か月余りの間に倒れる者が出だした。特に私たちの部隊は、「死骸部隊」と言われるくらいよく死んだ。それは、「内地へ帰れるんだ」というソ連兵の言葉を信じて、行軍途中で毛布や防寒外套などを捨ててしまったので、寒くなっても寝具もないので空きかますを二枚もらって、それをつづり合わせてかますの中に入り、入り口を閉じて寝た者がい

たが、まずこれらの戦友たちから倒れていった。

人間、何がつかいといって、空腹なのに食べ物もなく、厳しい寒さの中で寝具もなく、寒くて眠れないほど、つらいことはないと思う。

夜が明けると震えながら作業に出る、そんなことの連続の明け暮れに耐えかねて、精も根も尽き果てた戦友が、続々と言葉もなく死んでいった。その当時のことを思い出すと、身震いがいたします。

遅れて入ってくるコウリヤン、それを待ちかねて炊く、真っ赤な渋のようなおかゆができる。そのまま食べると渋のため大便が詰って腹が張る。寒さのため小便の回数が多くなります。特に夜中の小便には困った。だれが考えたのか水筒の中に小便をするのです。それを腹の上に置いて湯タンポがわりに抱いて寝た。水筒は亡くなった人のものをもらって、三つくらいを抱いて体を温めたので「水筒様々」でした。

生き延びるためにはあらゆる工夫をしたが、シベリアの冬は日本人の苦しみなど知らぬと言うかのように、遠慮会釈もなく日増しに厳しさを加えていった。

朝になって、寝ている戦友を起こそうとしたら、無言のまま冷たくなっている。人間の体力に限界がくると、こんなにも寒いものかと空恐ろしくなってきた。それでも毎日の作業はノルマがあつて何一つの手加減もなく酷使された。

収容されてから一度も入浴させてくれないのでシラミが発生し始めた。この予防として夜間に肌着を脱いで屋外でシラミを凍死させ、再び冷たい肌着を震えながら着る。その晩は寒くて眠れない。震えながらそのまま夜を明かす。過酷な労働と飢えと寒さ――。兵隊は死に向かつて自ら近づいて行く。そんな条件が重なってくと頭が「ヤラレ」、変なことをやり始める。中には空腹からか、自分の大便を「ウマイ」と言つてつまんで食べたすと、二、三日のうちに死んでしまう。そんな人たちがふえると、まるで生き地獄である。死亡した人の遺体は死骸室にお祭りをして、柩の前にはメリケン粉でつくつただんごを二つずつ供え、真っ暗い冷たい部屋の中で二人の兵隊が寝番する。供えてあるだんご目当ての死骸番を志願する者が多かった。

十一月ごろから翌年五月ごろまでは地面が鉄のようにコチコチに凍ってしまうので、地面に穴を掘ることができないので、遺体は雪の中に仮埋めした。そして地面の氷が解ける五月を過ぎて土葬にした。

日増しに苦しくなる中で、食うや食わずのわずかな食事を盗む者が出てきた。同じ釜の飯を食つて生死をともしてきた戦友だが、一日一日と餓鬼道に陥っていく。そしてその形相は、ぞっとするほど変わっていく。

夜中に立ち上がつて叫び、わめく、とめようとすれば、手に持ったもので殴りかかる。頭がやられているんだ。二、三日すると死んでいく。まるで地獄の世界でした。

そんな中でも、上官風を吹かし、ソ連兵にゴマをすり食糧を横取りする者もいた。外部との連絡を断たれた収容所は、弱肉強食で「生と死」は紙一重の生地獄であつた。

ソ連は、うそをついてでも、泥棒をしても、日本人の労働力による復旧が大切で、日本兵の死んでいくの

を見て見ぬふりをしてノルマを強制していた。

厳冬と、言葉のわからないソ連兵との日常の中で、無我夢中で半歳近くも倒れそうになる我が身にむちを打って死線を越えてきた。そして過酷な作業は依然として続いた。

主な作業は木材の伐採と夜間の石炭おろしの重労働で、力が要るし危険な作業だった。いずれもやせ衰えているだけに、死を覚悟の仕事が続いた。そうした毎日の作業をカンボーイというソ連兵がつき切りで仕事を監視しているうちに、顔見知りもできた。親しくなった。トリーカンという兵隊の取り持ちで、日露戦争で四国の善光寺で収容されたという民間人のかじ屋と知り合った。片言まじりの日本語を使う。その人に励まされた。というのは、辛抱の緒が切れて逃亡しようとしたが、ふれ合いが取り持つ縁で助けられた。国境を越えた人の情け。

束縛の鎖は解かれ、我れ帰れども骨身に応える明け暮れに、今日もだれかが死んでいく。さぞかし無念であつたらうと熱い涙がほおをぬらす。生地獄シベリア

の土となりたる友をしのびて――。

シベリアにて

神奈川県 新谷 俊男

シベリアへ渡ったのは昭和二十年十一月中旬、ハラルからブラゴエシチェンスクへ。

もうアムール川（黒竜江）は雪も降り、川全部が凍って渡河できるし、凍っていてつく寒さの中、糧秣その他各人の持ち物が入ったリュックサック（今まで使用していたわら布団の皮で各自がつくったもの）等々満載した馬そりを七、八人で引き、坂道になると応援隊が力を貸してくれる。そりを引いて行進中、腰に下げた手拭いをソ連の子供がスケートで走ってきて体当たり、素早く手拭いを持っていく。また、その物もとろうとする。こうして入ソ、まず悲劇に遭った。

ブラゴエシチェンスクより貨車にてシベリア横断鉄道のチタへ。チタで右タモイ左奥地とうわさされ、結